

# 末黒野

すぐろの



8月号 (通巻768号)

# 麦の秋

小川玉泉

鈴蘭の群るるは夢の降るごとし  
春夕焼塔の十字架眩しかり  
マロニエや噴井あふるる水の音  
ばらの香をまとひ園丁草を刈る

母の日の妻や朝から落ち着かず  
雨風の募る植田の幼苗  
枇杷熟るる山肌を這ひ雨意の雲  
熟れ麦を打つ雨激し姉見舞ふ  
句作りをよすがの姉や鴨足草  
兄逝きて六年や柘植の茂りやう  
柿若葉弾く雨粒見えて来ぬ  
咲き垂るるブーゲンビリア夏めきぬ

# 夏に入る

松本三千夫

蜷桶厨に暗き海のあり  
老鶯の咫尺の人を憚らず  
礁打つ波に立夏の力かな  
靴篋を取るや雷鳴だしぬけに  
電線のはびこつてゐる街薄暑  
鬱の字を手に書いてみる迎へ梅雨  
卯波立つ火の跡しるき海蝕洞  
水張れる棚田の裾や蕎麦処  
青嵐庫裡に白緒の庭草履  
江ノ電の柵は枕木時計草  
大黒のすこし風邪声樟若葉  
白つつじ瀬音高めて雨上がる

# 甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は  
次号は末尾になり以下同じ）

## 夏始

黒滝志麻子

樺山に靄立ちのぼる巢立鳥  
伊予柑の香りの中の島泊  
牛飼ひの低き口笛草若葉  
パレットに青を増やせり夏始  
朝涼やひと日のはじめハーブティ  
やはらかき馬柵吹く風や更衣  
古民家の梁の燻りや武具飾る  
堰落つる水の昂り若楓  
絶ゆることなき溪音や青胡桃  
軒先に余る夕日や燕の子

## 蛙

田中臥石

末黒野年度大会

一別の語や春昼のホテルの灯  
野蒜掘る径の小暗し山武杉  
連休の田植手伝ひ終りけり  
早苗饗の太巻寿司や夕厨  
筍を貰ってもらふ厨口  
依頼稿書けり八十八夜冷  
丁雨忌の暮れて鳴き出す田の蛙  
海ひびく畦や植田に夕日泛く  
蛙鳴く田に望郷の臉閉づ  
貝拾ふ足へ寄せくる若葉潮



# 乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は  
次号は末尾になり以下同じ）  
太字は推薦句

青葉風

熊切光子

卯月

小山紫乃布

光とも影とも見えて樟落葉  
松が枝の鷺羽づくろひ風光る  
湧き水のにじむ山径雉蓆  
湖の奥のざわめき通し鴨  
花擬宝珠幼なに道をゆづられて  
直ぐ乾くほどの山雨や花茨  
古民家の裏へつつ抜け青葉風

木苺の花はらはらと訣れかな  
夏来るキラリと胸のネックレス  
陽路師のこゑなつかしむ卯月かな  
母の日は先師を慕ふ日なりけり  
洗はれし空の碧さへ朴の花  
釜利谷の蛸を見むと一途に来  
洗ひ伏せしコーヒーカップ仏桑花



鉄線花

小山ミツ子

立夏

西川みほ

竹の皮脱ぐややうやく熱下る  
草笛の上手な爺を子の囲み  
鉄線花雨を残して友逝けり  
ただ病みてばかりの余生藻の咲けり  
淋しさに負けての酒や鰻の皮  
佃煮の山椒のききて祭かな  
すぐそこに雨の来てゐる揚羽かな

軒菖蒲

鈴木一三

縋るものあれば絡みて豆の花  
立て掛けて弾かぬギターや目借時  
春筍の砲弾のごと直売所  
堰音や棚田の蛙昼を鳴く  
邪気祓ふ慣ひの菖蒲葺きにけり  
桐咲くや保存民家の自在鉤  
母娘の七七忌の日や逆縁の子の骨納む

三度訪ふ惚け封じ寺山笑ふ  
酒釀す蔵を修羅場に恋の猫  
うぐひすの声張り山雨うながせり  
過疎の里灯すごとくに桃の花  
ひしひしと蒼む一湾五月来る  
外っ国の野菜あふるる立夏かな  
嫁と孫持たざる話題子供の日

惜春

松田泰子

ふるさとのゆききに春の闌けにけり  
桜しべ降る墓裏へまはりたる  
送り出てそのまま春を惜しみをり  
向き変へて稚魚の群ゆく春の潮  
花うばら海へ音なくそそぐ川  
葉桜となりて雑木にまぎれけり  
柿若葉村中の風匂ひきし

# 万 仞 集

花 菖 蒲 活 け 甲 冑 の 華 や ぎ ぬ 城 戸 緑

沖 待 ち の 檣 灯 滲 む 朧 か な 石 黒 興 平

山 頂 に 暈 の 日 を 上 げ 梨 の 花 森 清 堯

藤 棚 の 人 去 り て よ り 匂 ひ 濃 し 外 山 生 子

空 飛 ん で 眺 め て み た し 花 の 山 鍋 島 武 彦

検 校 に 見 せ た き 島 の 緋 の 桜 倉 橋 千 代 子

夏 め く や た ま の 会 話 に 疲 れ を り 白 井 美 代

竹 垣 の 男 結 び や 紅 牡 丹 伊 藤 敦 子

潤 む 日 を 映 す 川 面 や 遠 蛙 中 野 久 雄

揚 雲 雀 高 く 上 が れ と 肩 車 松 浦 哲 夫

花に酔ひ人にも酔ひて通り抜け	重田修
天辺に声置いてくる雲雀かな	脇澤久子
回廊や素足の心地よき日和	田村加代
花の宿客と女将の京言葉	田沼幸光
樟若葉巨木の樹皮に苔満てる	城田秀雄
転居先告げぬ媼や竹落葉	堀畑朋子
クレソンの花につまづく流れかな	杉本裕子
馬刀貝の潜む渚の穴二つ	波多野孝枝
水ぬるむ母と旅せし日のことを	河合とき
観音崎波すれすれに夏燕	川村亘子

# 巨林抄

大皿に波の色あり初鯉	及川照子
落剥いて厨たちまち野となりぬ	斉藤マキ子
引越しの荷物に小さき鯉のぼり	都留百太郎
蒲公英の絮やぽぽぽ空の旅	松井宮子
牡丹剪る思ひの外重さかな	竹村清繁
嘴に泥はみ出してつばくらめ	滋野 暁
葉桜や錆ゆくままの貨車溜り	椎名文子
土と水匂ふ筑摩の鍋祭り	澤田澄子
筆太の老舗の暖簾柏餅	細島孝子
炊き立てのご飯に卵昭和の日	塚越弥栄子
水底のおのが影追ふ水馬	鈴木加代子
てのひらにアルミ貨数ふ啄木忌	米山やすえ